

畑はそう簡単に戻らない

腹が立つ。あの見渡す限りの大平原に、太陽の恵みと黒海からの風を受けてなびく小麦畑に、とてもない大きな穴が——。穴の大きさは戦車が入るくらいだから10mもあるのだろうか。上空から見たら爆撃されたその穴はハチの巣のように無数にある。なんの恨みがあつて小麦畑に砲弾の雨を降らすのか、面積は違うが同じ小麦生産者として怒りを越して涙が出てしまう。

そんな穴は埋めてしまえば畑に戻せるでしょ? ってTVを見て思った方もいるだろう。しかし、物理的に麦畑を水田に、そして麦畑に戻して、これからも麦と大豆を増産しましょう♡と言うのとは悪い意味で同じだ。そんなことを考えるんだつたら、自衛隊の20式小銃握りしめてウクライナの戦場に行ってくれ! 弾丸はアメリカM4と互換性があるから思いっきり戦ってくださいね。

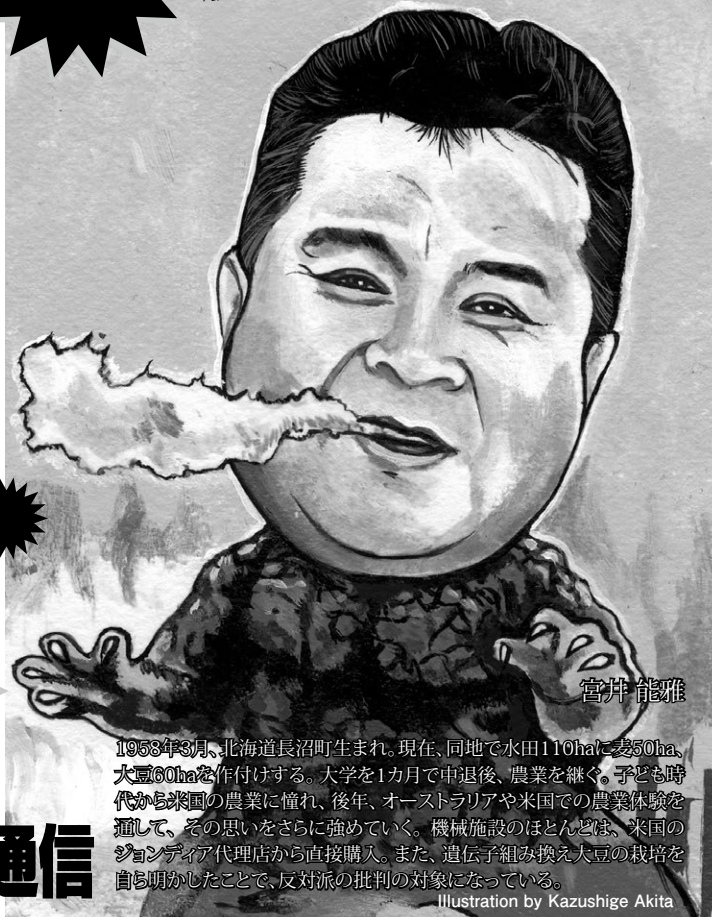
今のロシアではマトモなものはない物づくしだから、手当たり次第に下手な鉄砲数打ちや当たる方式なのか。正統派金髪・ブルーアイのご本家アメリカのように金が

あれば、GPS付きの榴弾で30km離れていても4mの誤差でピンポイント攻撃ができる。ネットで調べてみると、155mm榴弾のコストはおよそ15万円(自衛隊納入価格)だが、アメリカ製GPS付きになると900万円くらい。なんでもアメリカ製GPS榴弾のような精度を出すには、距離によるがロシア製の152mm榴弾だと100発撃たないと同じにならないらしい。ロシアの152mm榴弾のコストはわからないが、保管・移動のコストを考えるとアメリカ製GPS榴弾に分がありそうだ。

半島の付け根と同じで、金がない奴が暴れるとみんなが迷惑するってことですね。戦争が終わつたら損害賠償請求も忘れずにね。これまでの報道を見ると、ロシアの残虐性は昨日今日の話ではない。歴史を紐解けばわかる。前から言ってきたとおり、決してロシアを信用してはいけないことが白

農地は一朝一夕で勝手に増えるわけではない

Vol.176



宮井能雅

1953年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

日の下にさらされたのだ。

でも、なんで隣の国同士は戦うのかね。日経新聞によると、あのファインディング・ニモのクマノミは、同じ模様の仲間をより攻撃して自分のテリトリーを守ろうとするらしい。なるほどね。スラブはスラブを、インドはパキスタン、半島の北は南と——では、日本は誰と戦うのがファインディング・ニモと同じ行動なのか。

オレにも
言わせる!

北海道長沼発
ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

家屋解体は誰が負担する？

さて少し昨年（2021年）の話をしよう。前年まで1ha当たり40万円の農地使用料（小作料）を22年間所有者に支払っていた農地を、1ha当たり450万円プラス所有者の将来の税金をプラスアルファで支払った。

皆さん算術は得意だろうか？金利を無視すると、私はこの農地を二度プラス今回の売買の金額で購入したことになる。お前はバカか？と言われたこともある。でも、そのバカか、って言ったご本人は……農業社会から消えた。

地元ではたぶん一番の経営面積だが、ある朝起きたら勝手に農地が増えていたわけではない。でも、血ヘドを吐くような努力をして、地面を這いつくばって生きてきたのかと問われれば、ん〜んとなる。確かに地域の協力や利用改善組合（農業委員会の下部組織）を使えば税金はドカーンと下がるが、そんな雲を100メッシュの網でつかむような芸当はできない。あくまでも農水のお金を有難くいただき、皆さんに嫌われながら我が愛する金髪・ブルーアイが多くいる

アメリカの生産者から学んだやり方を実践するだけである。

日本各地にたくさんある耕作放棄地、その合計は埼玉県よりも多い面積だという。なぜか？小作人根性の持ち主がたくさんいると、こうなるのは間違いない。ただ、それだけではない。行政、JA、共済、土地改良区が一体となってやれば岐阜県海津市のように地権者500人で300haを一人の若い親分でもやれるのだ。なんでも否定して決して新しいことをやらない18歳以上、その前頭葉が老害どもは早く消え、都市に集中することが日本の農業を明るくするのだ。

購入した農地には最低300坪の宅地があり倉庫や住宅があったりする。結局はそれらの建物を解体することになる。昔だったら一日1万5000円に、運賃往復1万6000円でコンマ・ナナのバックホーを借りてきて、建物の横に深さ5m四方の穴を掘り、そこに瓦礫となった建物を放りこみ、灯油をぶっかけて煙をゴジラのように吐き出しながら燃やした。引き上げ可能な金属は回収して、その後、鉄くずとして売り、燃え残った残骸に土をかぶせて最

低でも3mの深さに埋没させておけば、マグマ大使が騒がない限り100年は農地で使えるだろう、と考えながら北海道開拓を進めてきた。今日そんなことやったら自分の敷地内でも逮捕され新聞にドカーンと載ってしまうのだが。

こんな話がよく出る。空き家となった住宅が放火されるとやはり木造部分は燃えてなくなり、解体費用が思いっきり下がるし、火災保険も出る。じゃあ誰がやる？さすがにいませんよね？ 良い子は真似をしないでくださいね。

こんなことで人生を無駄にしたくないのです正規の解体業者にお願ひすることになる。その費用は一軒あたり200万円を下回ることはない。10年前だったら80万円だったのが、今は解体現地で木材、金属、断熱材、家財等を分別するのでゲン系と呼ばれるベトナム人が頑張ってやってくれる。解体も昔だったら一日で搬送までできたのが、今ではたつぷり5日間かかる大変な根気の必要な仕事になり、作業する日本人が少なくなってきた。

昨年の解体費用は住宅3軒と小屋一つで総額700万円くらいだった。農地の売買時の解体費用

は旧所有者が支払いと約束している。正しくは借地開始時点で売買する場合には更地にする契約なので、解体費用を私が出さないことになっているが、現実はどうもはかないケースもある。契約者が急に亡くなったり、法律に詳しい親戚が出てきたり、解体費用が高いから少し出してってくれて、後出しジャンケンを言ってきたり……。ただ、ローカルルールの3倍の小作料を払って、信頼関係を10年以上築いていけば、お互いの歩み寄りにはスムーズに運びますね。

そして、建物は解体され更地になったからすぐに農地になる、わけではない。だいたいそんな土地は軟弱なので暗渠を入れ、火山レキを10台分入れる。その費用は300坪で50万円なり。入手した土地が麦や大豆がすぐ栽培可能だと考えること自体がイヤらしい行為なのだ。

昔から「ミヤイは土地があるから」とか「親が持っていたから」と泣き言をいう小作人根性が多いが、そういうハンカクサイ連中にはこう言います。

「それは残念だね、君の親は君に財産も教養も残さなかつたんだね」